

Centimetres

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak
LICENSED PRODUCT

3/Color Black

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

繪本合邦過

五



13
872
5



門 遠 13
號 172
卷 八

繪本合邦辻卷之五

目録

長寺の老尼敏高が狂言成話

農民高橋が死を哭き成話

高橋他左衛門の津浪に抱くる話

高橋他左衛門の教経と小法師

高橋毒妻の奉言談述

浪士等婦女子に戯る話

西尾花人初巾の強弱を挿す話

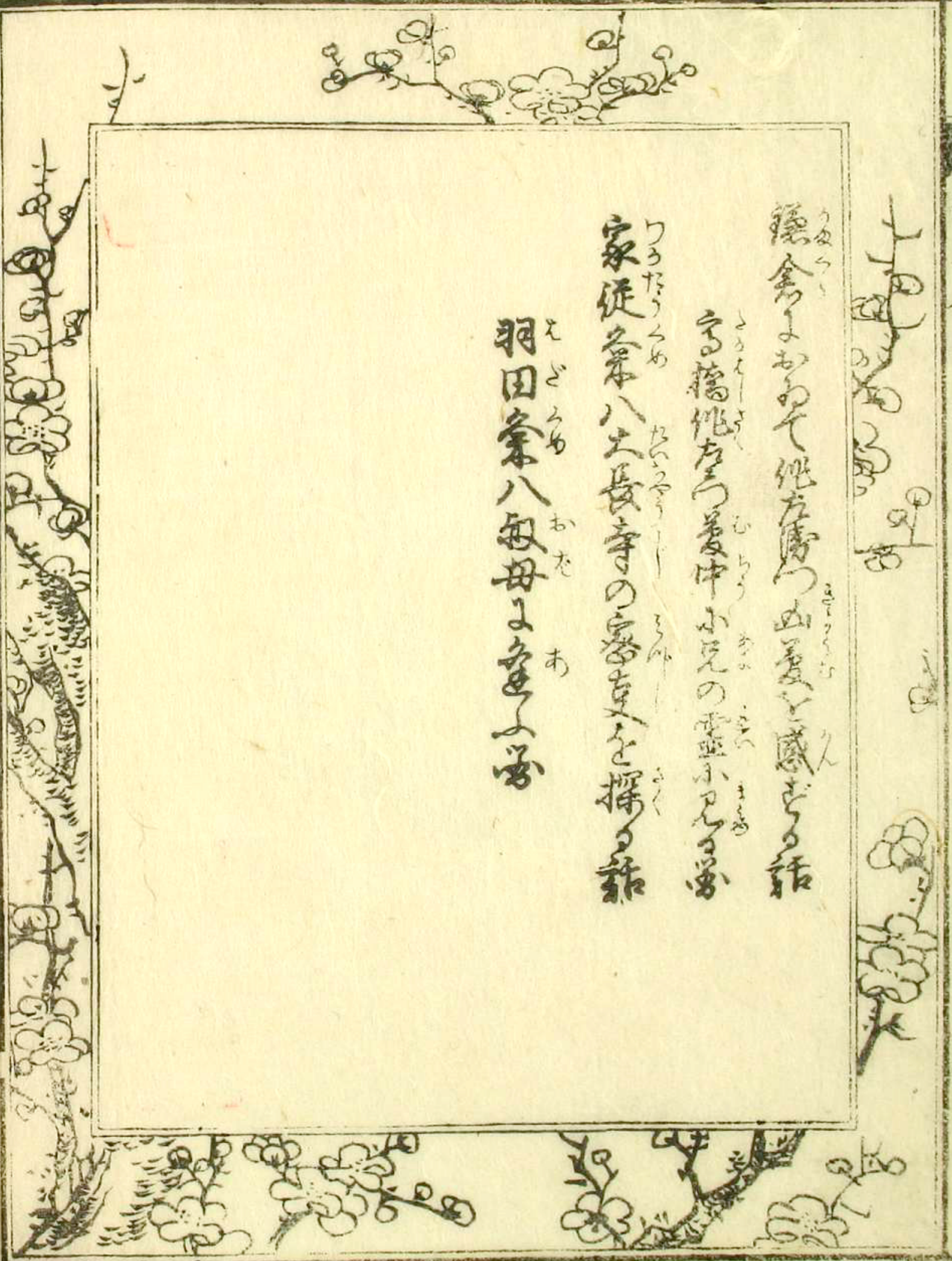
明治三十七年
七月十日
購

上
藤倉よわめて他在傳の山夏と感ずる話

藤倉よわめて他在傳の山夏と感ずる話
今橋地なる長中少兒の靈小兒の靈

家徒兼八丈長寺の密書を探る話

羽田兼八母よまゝの書



繪本合邦辻巻之五

又長方の老臣敏ると警戒結

于云寛徳と宥くする門の報と信王祐忠謀と陳て之槐の系二期
以其験符節と食ぬく天道の信はだき此是れよと獨り橋清た
傳の忠臣に意欲と重く民と恤く之槐の門を云の以及び暴戻
の又二命と落せり又及の報意討あつと異るるや柞別は故あつと儀
徳を智の側あるは死あはれに却流も防波の邪士人長方にむく
る橋が撲死の伴孫と師が自殺の取状を番の事どもありと雖源は
よ事と海とを老臣の指揮るも故なくも橋が死骸と交取之板
て彼方の初神と妻くり述依之充長巡一傳中守辰の首よ於て板
くまは敏記云御神あつとる橋清を愚の才藝文武に甚く充

繪本合刊 卷五



農
高橋
死
哭



繪本合刊 卷五

強固の勇士我家に就く二と卒める事ハ彼令不遇の良死
 上よ新く又人不足と云ふは之後と困も容易早下成敗と云ふは
 後母若軍のねまは遇く抜合も及ば一命と命事と事之云ふは
 死骸佩刀と事せば思ふ大膽危が亦出た付度後く控むと留り
 ぬも多るなるはね礼の士珍と推て側をくんと故あうるやは
 是二又ね礼のこの我死と教言せば先禁固をて山方へ通り事分
 めるよとて刑とかだるに罪付は月殺せし後子書の子なり女等
 ねらふよとい付富屋下野を出御前の清右衛門忠房と云ふは
 我共了れども其長石審能く前後と成るるは先事と大膽危控
 高次とて清藤捕の事清右の忠云はく暴戻の足と云て強て首なり又
 長ち又能くね礼坊のいねねと堅く終共らんと水及の事と云入胆危控

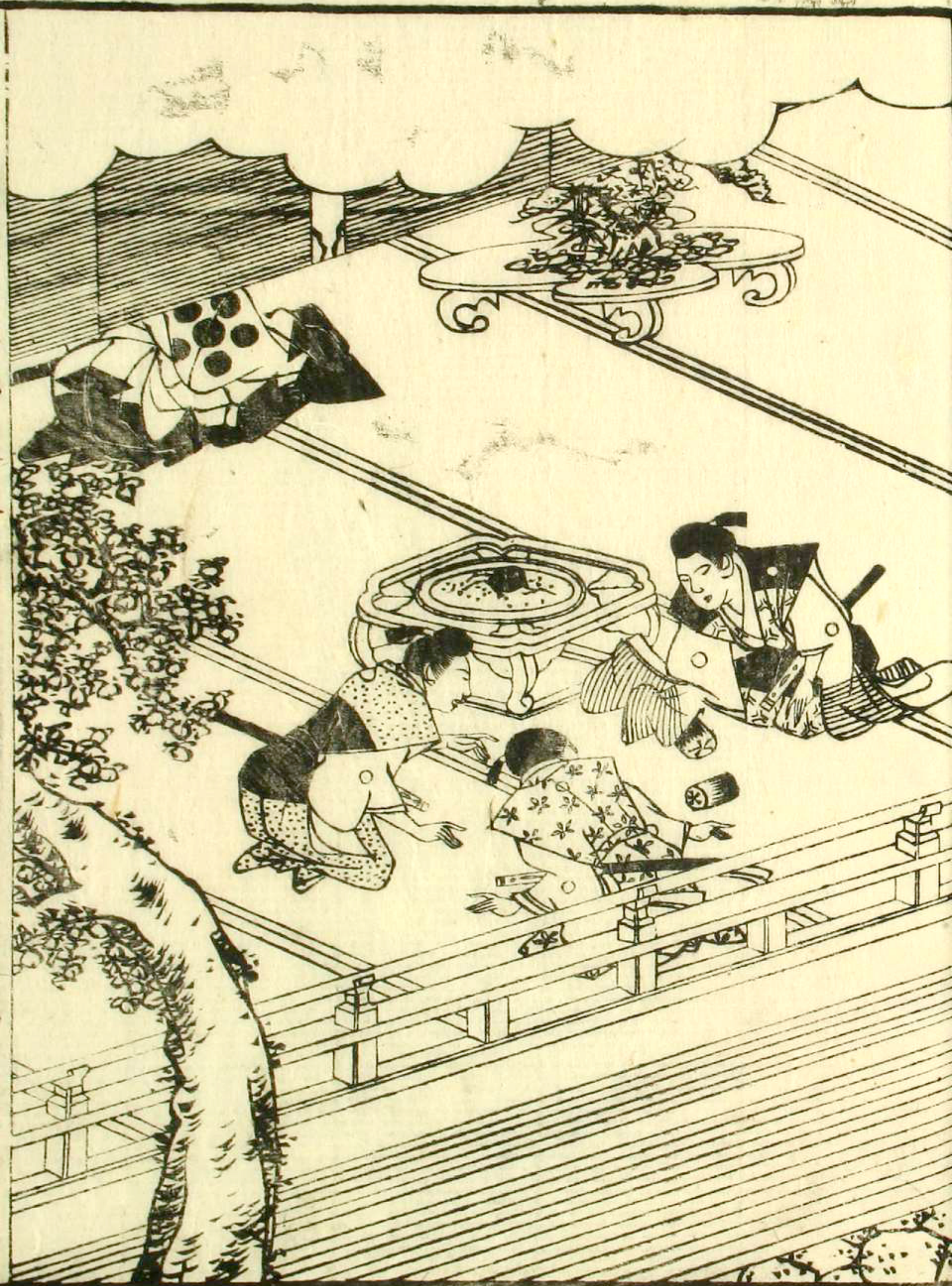
清左衛門が忠云と惣と彼方へ百餘で御前討つる事と云へり又と云は
 作て討せりといふ事と云へり又何れも亦是處家取胆の良辰と云はれ
 事送懐少くは控も云横横死の次者へ親しく見ざる事と云へり推察
 の由はよて遠に云ふ否は定ごとく長智術と云へりして其定状と探り定
 り孫三郎がね礼の取ねり相をさくは是れなりと云へり大膽危控思ふよ出た
 る亦よてもあはれあ家の良辰と云へり一御遺恨の故くは云へり長良
 河渡道の假がごとくと云へり御門はて見せしむる事と云へり内々
 加那次(伴)通らき己後の致去戒ある事と云へりと憚りなく云とせし
 事と云へり月日のいさ様う死骸と云へり送らき婦子二男は又早せし未子清之
 郎幼弱の事ハ成長にもまづか縁と云へり是別は技助と云へりその有
 親類の事ハ作ばさとして後後又事高居一病又長良の親類と云へり

伺のせのひきりおのり大長吉の充居生駒源又左衛門の小幡孫らう忠死に
 ようくもる面難美の切と先は源俊よる橋が死骸と功波(送)とつ
 ども功波(の)つと源大膳充居おたる事と保く秘しられ大膳充居腹
 中のと信及ひ充居の介其言とあるものさう又功波より不審の筋と
 もも来りて先お決の思ひへるとども大膳充居の暴悪徳とるよきてハ
 功波の橋長徳の救とるにむん不冷大膳充居の性質凍を致成と
 りて志と改めりて保のよださよあはれ世益のさう又何日と移り内ひ
 不慮の憂ありて悔てたつび早く一をに押替困窮とさせさう再ひ
 するは後よりその心後とすさよあはれと志居のさう法符合し橋
 て敏通とつに今の次才充居おるが有報とさよ及し敏通とつは橋
 ありてやうて大膳充居と敏申するさよ又押替氣あるとさよ心何と徳と

後の禍と功波の功波家へい巻初と痛は何あてま橋が死令く大膳
 充居おたると保とつどもお初致成とからさうい子細あはれと知ぬ
 保とつ過し源俊のゆはよと及ひのひきり

その橋は左衛門の赤形は(抱)らうて作

斯くも橋清左衛門の才に同苗他左衛門といふは往年も橋清左衛門の源余
 下向のおお小枝を次郎が託はさうく姓娘の妻と保ひて内園一妻女と
 そのの其歴と信は生れたの後赤腹の子と枝落して養育せし男の子う
 虎子生て三日こよ大馬と喰の事あり這箇他左衛門小枝を次郎が勇武
 の事と更替く稍生さよとさうひて才居夜量庸者のはよありは又
 本武徳又信心とさう保かえよ解よ秀り又兄の教誨と保て才徳年と
 又とつ幼稚の時よりさう橋が麒麟児と稱して清左衛門が愛子の多



高橋 恒老 清門
 敏 純子
 仕人

と疾るるものなりけしは家中に居るよりしるる家の先君御中守の
 之の種は甚しく十載の春二男あるも物も出されく慮後の節は加へ
 うよお夕の使令と初る事四よ成者のものよ助臣にふ奉る事
 ては仕る形も其の後余郎中に於て宗亦大に敏経公と始御門の
 法度と振清ありける時慈真御甜よ及び主事俱よ最威と解者も振酒
 と勤め和順の雅活とせしむるよ大に敏経公倍倍の慮徒とせしむる
 環して大事の熾るると厭ふ大盤とをく遇らまよと令一の六慮況を
 亦て大盤と持ある歩をくあはれとせしむるよ久足と御澄と一膝お拍
 子大盤頗く煽燃るる之炭二ツ席よと燃燗より有合慮後大よ
 き周章騒ぐと又とも燃燗るる炭をまぬわはれともせんまぶかく大著やあ
 とひりめくあまも指末たよりとせしむるとまあはれと杖と纏く夜顔に
 其炭と拾ひ入大盤と指て徐くと清次に退く其神意自若としてふ
 たよまもせしむる屏よと大合のよ方く柴がなを智慧の人よ勝たると病
 其方の今よ考初まよまよとせしむる勇決後来せし長せよ白又と踏
 鼎は陳んく神心と礼するの操も情ならきて末都一用く所貴嘆然
 まるてとく御盃と下まよとくれはる指雅有と及載一と款とわく香干
 をよもに執るがよ式後とて退んとせしむる敏経公其盃とひ方と作ある
 其指思ひ及び懇命にぬけのせんと踏踏せよと正奉側より作の上は香
 ひ思ふがく款せよとの清指揮はる指盃と甚よと敏経公の御奉は指膝
 けしてとせしむるぬけて敏経公盃とせしむるひ思ひに及ひ被が奉の誰がふる
 やせしむるの後の天晴用よまよとと尋尋とありと稱美一のひくれがひの柴

と疾るるものなりけしは家中に居るよりしるる家の先君御中守の
 之の種は甚しく十載の春二男あるも物も出されく慮後の節は加へ
 うよお夕の使令と初る事四よ成者のものよ助臣にふ奉る事
 ては仕る形も其の後余郎中に於て宗亦大に敏経公と始御門の
 法度と振清ありける時慈真御甜よ及び主事俱よ最威と解者も振酒
 と勤め和順の雅活とせしむるよ大に敏経公倍倍の慮徒とせしむる
 環して大事の熾るると厭ふ大盤とをく遇らまよと令一の六慮況を
 亦て大盤と持ある歩をくあはれとせしむるよ久足と御澄と一膝お拍
 子大盤頗く煽燃るる之炭二ツ席よと燃燗より有合慮後大よ
 き周章騒ぐと又とも燃燗るる炭をまぬわはれともせんまぶかく大著やあ
 とひりめくあまも指末たよりとせしむるとまあはれと杖と纏く夜顔に
 其炭と拾ひ入大盤と指て徐くと清次に退く其神意自若としてふ
 たよまもせしむる屏よと大合のよ方く柴がなを智慧の人よ勝たると病
 其方の今よ考初まよまよとせしむる勇決後来せし長せよ白又と踏
 鼎は陳んく神心と礼するの操も情ならきて末都一用く所貴嘆然
 まるてとく御盃と下まよとくれはる指雅有と及載一と款とわく香干
 をよもに執るがよ式後とて退んとせしむる敏経公其盃とひ方と作ある
 其指思ひ及び懇命にぬけのせんと踏踏せよと正奉側より作の上は香
 ひ思ふがく款せよとの清指揮はる指盃と甚よと敏経公の御奉は指膝
 けしてとせしむるぬけて敏経公盃とせしむるひ思ひに及ひ被が奉の誰がふる
 やせしむるの後の天晴用よまよとと尋尋とありと稱美一のひくれがひの柴

のる橋はちの二男はちのPとありは渠が足清方の末弱冠
 として足清方の勝を足清方の二獄とP付に職事と勤まを成のの
 ちから渠足清の後承家の棟梁ともなるべくあつたもも憐れか
 其のひと稱し之の敏徳を定ま居下り良材あり國家の才とて一
 系も他方のめと異れとて養育し未だ暇心と妻人と希事とし
 渠二男を二女ありてきく叶とていよもあじ葉の柱とまよとて
 やと懇意を有るに心の中に情ありと大領の懇意を辞さしめ
 く暇者あるはより反清なるもその心をまゝ面目とせし難有
 へ敏徳も承継しんと御遺言の付に在るのとあつた連らま
 加へひりかえ承継の執事益精と勵して法たと習練せしむ
 遇月にはちの二女は孫二百石とありて法西尾流に於ての法と

ていひける

この橋を妻のちとよむ法

即ちもこの橋はちの二男はちのPとありは渠が足清方の末弱冠
 として足清方の勝を足清方の二獄とP付に職事と勤まを成のの
 ちから渠足清の後承家の棟梁ともなるべくあつたもも憐れか
 其のひと稱し之の敏徳を定ま居下り良材あり國家の才とて一
 系も他方のめと異れとて養育し未だ暇心と妻人と希事とし
 渠二男を二女ありてきく叶とていよもあじ葉の柱とまよとて
 やと懇意を有るに心の中に情ありと大領の懇意を辞さしめ
 く暇者あるはより反清なるもその心をまゝ面目とせし難有
 へ敏徳も承継しんと御遺言の付に在るのとあつた連らま
 加へひりかえ承継の執事益精と勵して法たと習練せしむ
 遇月にはちの二女は孫二百石とありて法西尾流に於ての法と

りも先より見届け付よりなる籍号怪する早く去去し勘定せが
 人も先へ垂いと替へて彼もの人入は取り多ひ法人社をのぞ中るまじ
 け方も勢よして其具とるに我物種よまをまといひ女こそ籍籍されけりよ
 正有るまじと云候は中にも所見する二人の士彼も堂よ荒くうも春もまじ
 取て依てこれお擲はせと人々女子不致急よ其場と遊んとするも餘
 のまじと云候て婦女子又抱付腕は理不々に狼藉とおんと此故は女子入
 ぬり帯の人のとむひ家敷とまじ武士の有まじれ春初尾籍するうと云候
 一人のまじと云候と云候しかあるに(ま)例もよお色今人の襟と揃て一
 人付付付より候のまじ女子今今候縁と云候しと云思ひん候とも又
 候しを云候たりまじと云候女子も長居の益と云ひ蠢二人は目もその
 候下候と聚足早よことゆける誰と云候しけはは度聞しる天晴武は乃

如きうりと家中の面より嫁娶の事と云へるもの勝て候と云候西
 尾宿のいと許は凡嫁多貴姓と候て女徳の道と云候て本と云候女育
 りまじも武士の妻と云候に堪たまは凡庸の人と云候せんま候まじと云
 循して時日と云候し内他なる下と云候しより其お人と云候るも忠勇の
 りも亦抜群よして武備文彦も亦あるはひるし候は尾宿は候ひ分社
 我輩と云候たりと云候嫁娶の事と云候と云候と云候し再び思慮と云候し我面
 家の世家も縁の長よと云候形素の仕に候方より争んて縁と云候はもその
 女徳と云候と云候おるに百一服刀のをまあつた中物のとるん今一度
 候く別後のまじと云候何ひ候し其後事と云候もまじと云候し一の術と云候
 ありと云候下と云候と云候と云候茶舎と云候と云候と云候と云候と云候と云候
 又及んて尾がまじと云候し主ある常の礼節と云候し極まじ會席も候

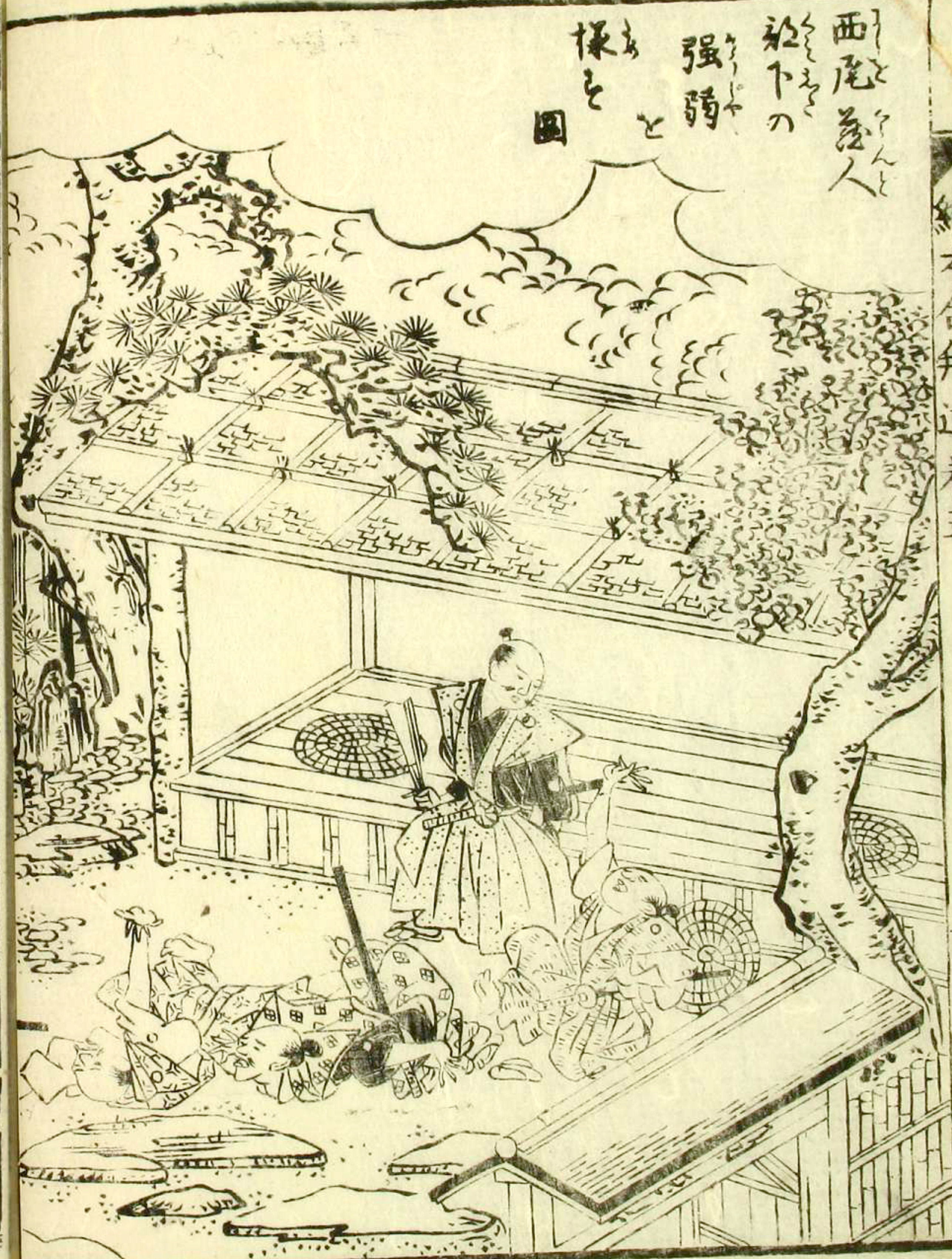
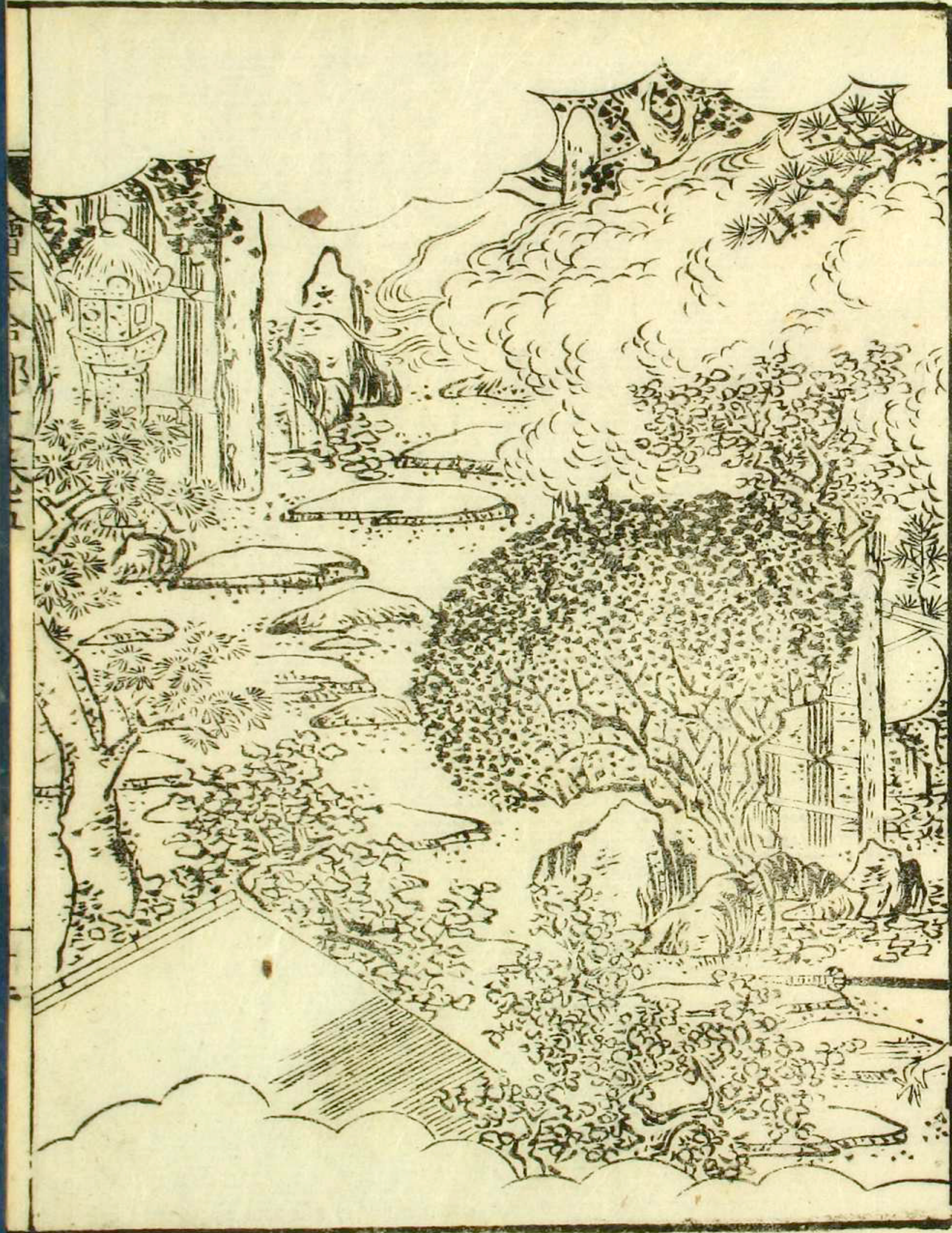


浪士等
婦女子
大
図

繪本合巻

夕暮の合弁はさくはさくの夜活とまし後の素内活弁もあはれ
 てついでなるこは後の侍付も終つてようみ抜目の陳白も大業と決色
 く鶴の合弁の後世係とく侍をて向合秋もまじうと切て板せ玉返
 あはれやうも強業の入符なれば運高のあがとく大山の崩とまじうと
 活弁の合弁も有合弁のゆへにゆへにころなるといふもよ登て一交もたぐひ
 例式は地は伏して年と掩ひ又さうと在出もあつ其中に格ふるも初は
 のめく腰とさうと膝と周業はたと訂いなるもさうと鉄炮の響はあつ
 又は入のあつせうとせしむるも入のまじうとまじうとまじうとまじうと
 ち格ふるもあつて年月さく清も入つたもさうと俄と拜して返をさ
 るもく夜顔の妙とちたひ再び板弁の肉も入張業終ると其後
 胸と背違くの侍とてとぬるもあはれ今日不意の術とぬる格弁作
 播練さると何ひあつけよの徒念と抱くたさにあついと良辰と擲く
 娶の旨類と通どとくもさうも格弁細ありとくはく播練さると
 あはれも詮方なくおとそあつとめと好く事と知くさうとあつて
 の侍聴にまじうとさう格弁と拜するも東不意のさうとて一日はたの代
 御若もさうと日あはれあはれと姻家たう人事とやあつと細ありと
 陰く拜せし中鶴も同を事あつとやと侍あはれさうと格弁と作の
 せもさうと止し射はさうと格弁もさうと作あはれさうと我家の
 とは大任と命し即ち格弁もさうと姻家さうとさうと知くさうと
 ちも幼あつとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと
 を心也の格弁もさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと
 石丸の格弁もさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと

石と仕らん君妹の可成法陸よ甚なるも嗚呼が母しくいづも君
 ありませと後ひくはる君不細と若く人熟世態とんるよ父母と致せる
 又天地の如く敢て其意よをざる君も終りの孝養とこそは君のおよ
 一命と捨る忠義の操あるものも果は富貴と希も縁と命の罪人とする
 りも多くいませと平く固門の恩をよ我心と落しよるよ定ぬく固志情を
 く忠心をよその准婦言瓜用道よ背する理よ迷ひ深敷形念もざるよ
 なく會敷の強と云く恥とせざるの勝る教かごとく思つよませと平く
 素志と遠げ後娘令名と命とする人君子の笑と懐りの敢石心致疎の
 勇とよあつよまじ能くもそ之私物不才のものませと要る會敷の域よ福
 君の鹽定と辱めせしん事必然るなりん嫁娶の礼ありん徳嗣と成る
 先世のふ祀と承くる孫よ傳人がおるなりん和のり足清方の防波よ成て婦
 家相續はもろまへ祭祀の地の妻なるも加之清高永許の世居有て
 執事防禦の備へも欠るよあつて私と形よ在けるハ御太馬乃其
 加と云くそのものと思はるがなうりるるに若く子孫ありん附ね候せし
 不才のものふくは清高永許に放くまよ不用の人なり君彼命を恤て石仕
 りるたれも地中に放て是とんるよ思ひんや故よ妻と具せざるの君と
 妻よいと懐なくり述へる敏徳の結成りひはが不存也一も又同原より
 ありしよも素るよ子細ありん尾が如く嫁娶の義文とくり付人といふ
 どもが志候は背に思ひん事く事と保下と作ありて暫く其法め候はよ
 く其法教く内命ありと雖作を志の懐く志とて終り命又從ふべきが
 敏徳よま操の堅固なるよ其美よ其美よ其美よ其美よ其美よ其美よ其美よ
 ぬまひける



西尾
於下の
強弱
採と
園

本合年辻巻五

鎌倉の政を世に傳へて感ずる法

斯くも高橋は左馬の敏經の所是地は異なりて界を如縁の恩令
 思ふに京儀は年々より少くは統の職は任に京儀五百石と領して
 今も在初に時に年々は格入方より支忠房と孝子の門は求と遠傳の格言
 其世の後にゆくも猶存前と今に如遠箇高橋は左の君事忠
 義鉄石のめりそののみるは孝友の情亦疎る事十歳よりして代々も移と権
 衆時の喜同に其儀をとり替替熱固と改定事はは又清左衛門様
 世の後に足清左衛門と名取をとり替替る事十歳よりして代々も移と権
 其よふまへは仙左衛門と友愛する事十年よりして代々も移と権
 名はする事と又は是所へ百里の海と隔と色俱に忠房の名を改
 其名と權に如次舟遊の後に足清左衛門と名取山水と道達し性情と流
 て徳年と来たりと約して歳月と経るに今も四月の末より二月仙左衛
 其名をとり只獨書齋に籠り書懐と繕くはぬ其の人とかはし流法の様
 と其のどろ小水二文の漏る人んで其の物もくはとある事より
 室と用は春月朗に地と映し微風斜射る技と初て梅香に挑よは送
 光系羅浮熱系も初と坐よまきこの情と色し又熟思は梅花まきよ
 週て梅香と送る事去年に後人年々より衰と更よ去年は月より次
 人七十七才来稀うらの日と足清左衛門と名取は其の節物風を色する
 のゆきと成つと色と情頻に後て難く不圖側と今もは足清左衛門の
 其名をとりしてゆくは左の且醫と且候び其足清左衛門の節物色は
 今突然に敵廬と訪る事年の病よ先は方と其と初て如きは清左衛門
 又は他の云々く其年来足下と約とよし其純の忠志とを



高橋

夏子

入圖

高橋夏子入圖

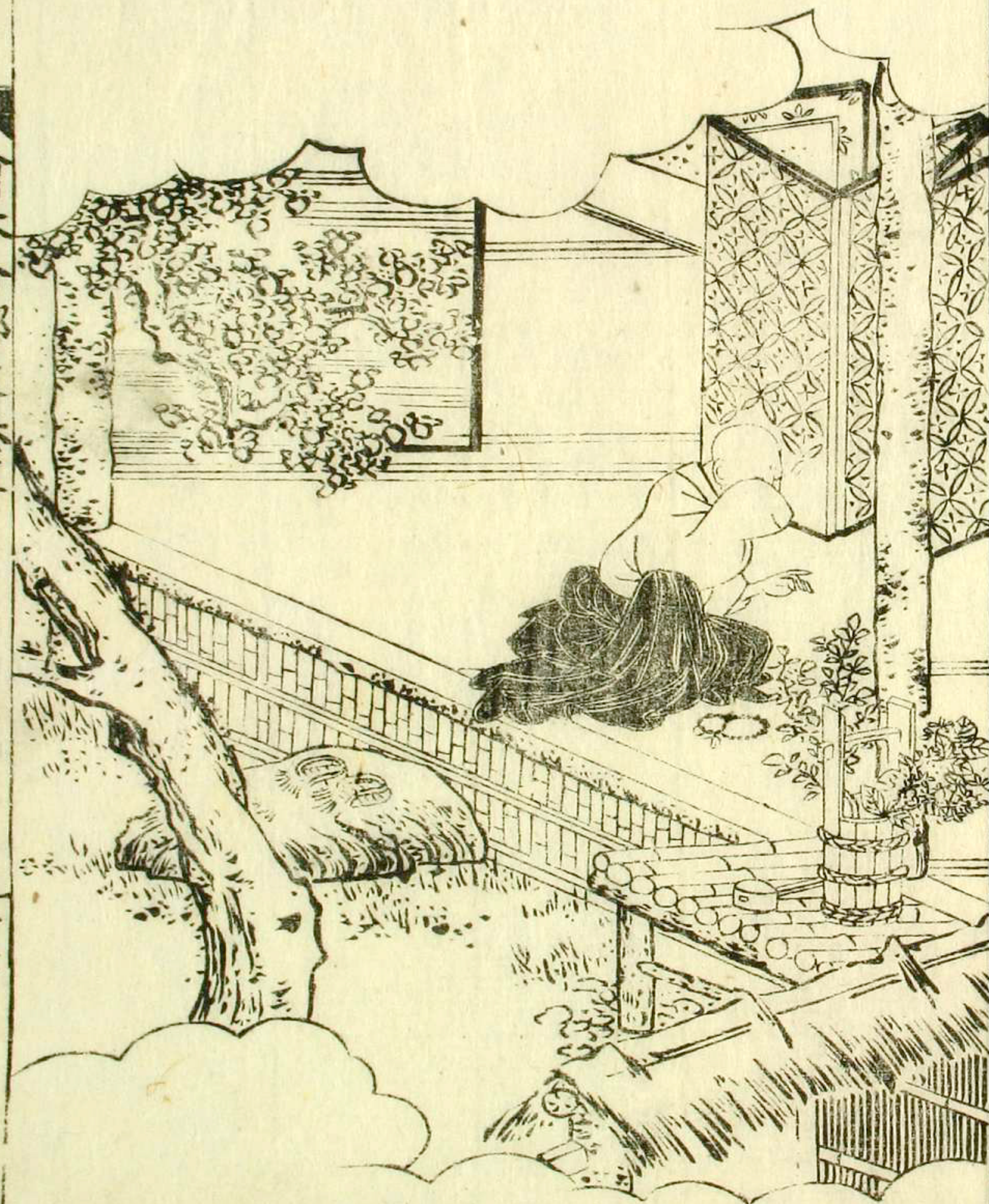
君恩と報一切のものは其の老来と致まんともあるを討て途は
して元々の次第の端で身と先ひ京志皆鳥有と云ふんといふ下の家
と云ふや切らるるがぬが時来と云ふ決と云ふはくつへ他方の事以て其の
んと云ふも又早其の事と云ふ人逆めんともいふ目覚て有り云ふ京を
南柯の一夢にして忘るの月夜を病のそ建強く然眠は討せり他方の
是れは元初筋は又変ありて未法の内と云ふや我故定と暮の情切は初
けさるも又と云ふしうとけりも勇決の仕方のも疑を止極く一歩はもと
論して一決と云ふに足清た其の横死の次第と詳は昔越と云ふるう
我の者乃山北たの事を知り寂然然歎の涙は咽々うぬわるるたこと
神は先中(外)と通し存は死して死後の礼と云ふ初なる

家從兼八人長子の器事と探る法

我て之も格化を清つて家に就て足清な其の死と哀事日我は他
く筋道の末書と用て熟読し其始末と考らに足清なるへ筋道家
能く其を述べたる武彦の昔人まはるるの禍遠極く記さるる宜
死と云ふや中しはしと云ふは只一人の親士と筋事能く其情一
蓋は兼中と謂て身と云ふはありし事年々に猶も其の哀事のそ
控と云ふるは是れはと云ふも己は其の事預符合と云ふは
にもあはれ事以て不審横死の形状より凡そ足見の仇は其の天
たるもの必恨と報と云ふは其の事なりといふ其仇己を云ふは
至意と思ふと云ふは其の仇を報せしめんと云ふは長子にて
横死の次第と事しく探問しと事以て思過せし其後より羽田兼八

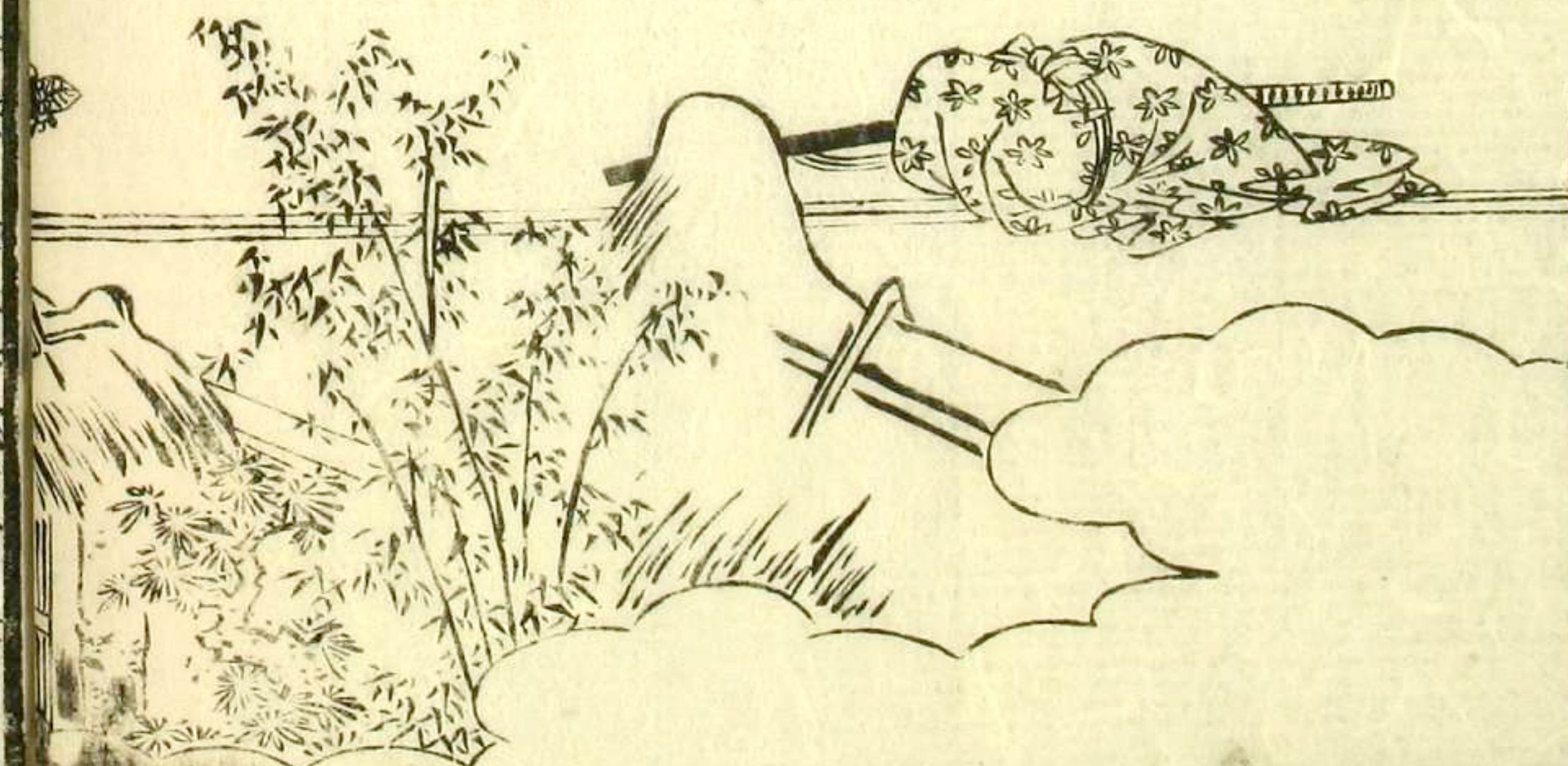
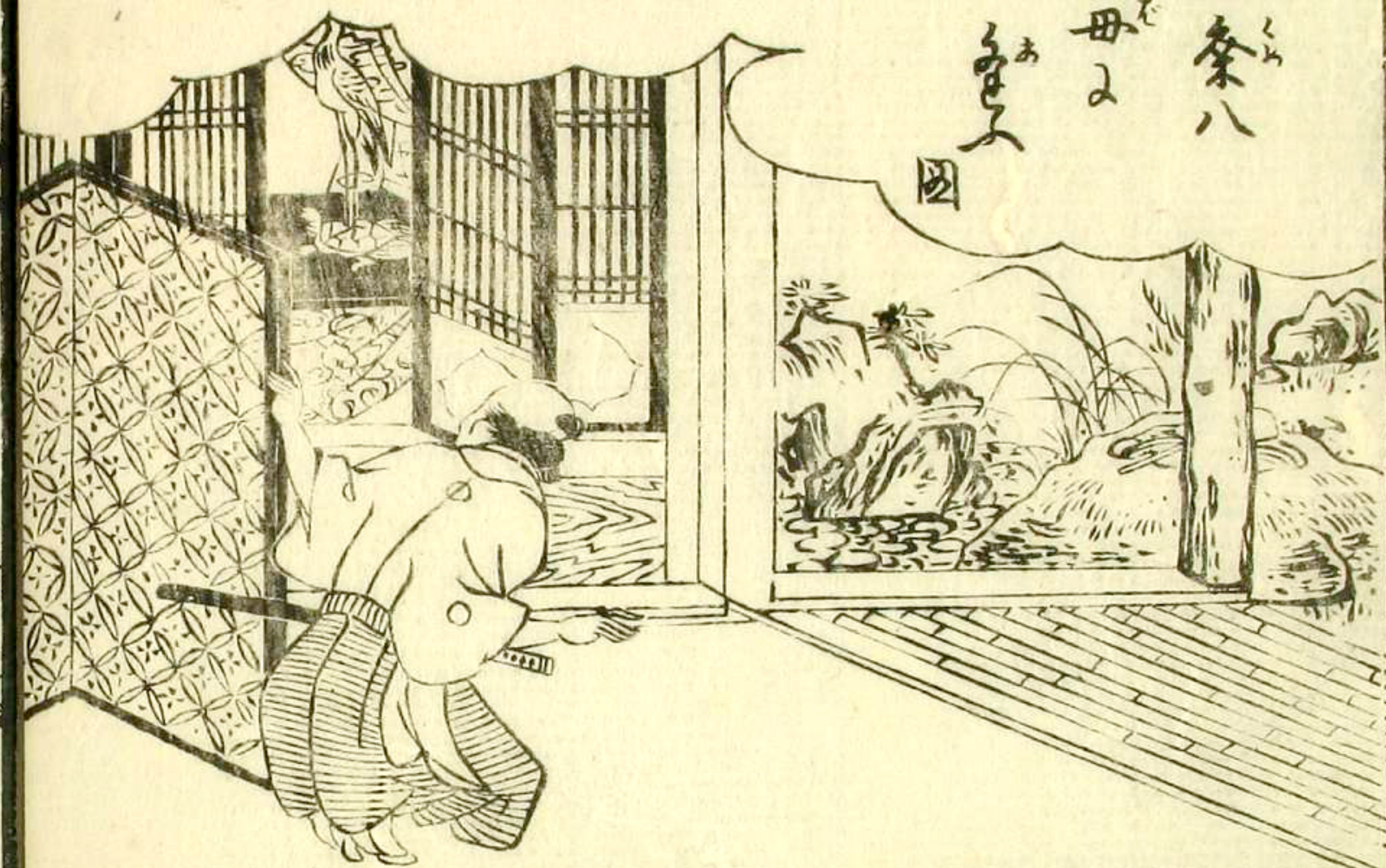
て伶俐忠実なる仕立あると老翁は又折即今宿波より夜事と告げ
 なるにまよはぬ地へ赴くと執とうりし甥清之助援助の事と法親
 此の足が横死の形状を尋ねの事もあるに迷に内圍して宇吾と探
 んと多どは官の習ひてふは任せどは我に代て團は内毒一く突
 吾と探て痛は苦あせよけるゆゑに子細あるにまよはぬ世にたうと
 と懇に命じ法親頼への事状及びは後の報と付屬しまよはぬ桑八並二其
 命と死堂し翌日鎌倉とまよく只後に及ともをいりと終く宿波へ
 悉くも指が書翰及びは後の報と付屬し清之助が横死の事告と同
 とのども大長ちよて後し来るまよはぬ法親ふめるに法親は桑八と
 却したるまよはぬ宿波と出まよより大長ちの从内と細細し或
 い城下におりし又の村あるに休みて館内の初聲と探りす又團下は
 の若とそと此の初作よりト奴僕の手悪知ぬ事を推して同い

流はまよはぬまよはぬ宿波の事ハ館内におおくもまよはぬと知ぬぬの
 多まよはぬまよはぬ宿波の事ハ館内におおくもまよはぬと知ぬぬの
 とよ人れ執して宿波の事ハ館内におおくもまよはぬと知ぬぬの
 桑八も宿波の事ハ館内におおくもまよはぬと知ぬぬの
 一先宿波へ内圍しは方あると大長ちの城下と誰まよはぬ町洋も
 不よて桑は口十勝りの厄花も捕と探て来るまよはぬ其面顔物と
 なく知識の事ハ館内におおくもまよはぬと知ぬぬの
 宿波も宿波の事ハ館内におおくもまよはぬと知ぬぬの
 八異て我名はぬも桑八とより桑も先も智人の横死と遺志たりぬ
 白く人よていとけ方よりも宿波の事ハ館内におおくもまよはぬと知ぬぬの



羽田奈八
叔母

圖



たる叔母よりとのまゝなほとどむとて
 たり我父母もその事とてうのつて
 云武も方よ甘く今後主人の用事
 とも申すまゝの用事とてとれぬ
 是は三洲の村の棲居の住ひ
 の津とて名に曲居居の中
 ありの形も記せしとの位牌
 叔母涙と流し我後念とて
 とと方乳母の甘くもあつた
 其本とせどもいふや養子今
 も申法と初め枝助と名を
 養子と名をくつたは下
 其今養子と名をくつたは下
 切るといふはもとやと聞
 ともは若死のうへ今も
 うさう涙も指と名をくつた
 彼因て御門の権執とて
 て一対のあはれりひる中
 とさるるう若くもさるるも
 換死の多き候と知り夫の
 活事と下と列と苦まより
 と作よとて若くもさるる

繪本合邦遊卷之五畢

